

幼稚園時代

と

その後



海 卓 子

幼稚園を修了したこともたちが、稀に訪れますと、「あーあ、やっぱりねー」と顔を見合わせたり、「あーら、まあ、あの子、変ったこと」と、思わずつぶやいたりします。

幼稚園時代と変らぬもの、変わるもの事実をたしかめれば、逆に幼稚園時代に教育の可能なものと、そうでないものとの区別ができて、あらためて幼稚園教育の効果と限界がうかがえるように思います。

修了したこともたちを、小学校時代、高校・大学時代、或い

は社会人となってからの生活に分けて、その変化の有無を思い浮かべてみましょう。

但し、意図的に観察することはなかなかできませんので、稀に「おやつ」と思った印象を並べるだけのことですが――。

☆ 小学校時代

昭和33年から毎年、小学校二、四年生を対象にして、夏休みを利用して二泊三日の合宿生活をしています。

同窓会のリクレーションとして、子どもたちの希望により始められたものですが、私共としては、修了後のこともたちの生活を知る絶好の機会です。

今までに四回しておりますので延二〇〇人位になります。二年生の時参加したこともが、四年でもだいたい参加致しますから、一三〇人位のことを観察したことになりますでしょうか。一般にいえば「相変わらずネー」ということになりますが、四年位になりますと、変化が目立ってきます。

○ 行動が積極的になる。

幼稚園時代に、引っ込み思案であったり、神経質で慣れにくかったりすることも私たちは私共の関心の的となります。このような子どもたちの中に「しっかりしたな」と思う子どもが何人か出てきます。

* くに子の場合（小学四年）

この子は、幼稚園に入った時、自分のしたいことをなかなか口に出さず、「くにこちゃんする？ しない？」ときくと、ニヤッと笑って、首を振る程度でした。

この子の家庭は、祖母が家政の采配を振り、父母も祖母に気兼ねをして暮していました。この子の入園についても、祖母の反対を押し切ってやっと一カ年在園することができた程度です。

ですから家へ帰れば、祖母の相手をして暮し、友だちが誘いに来て「行キタクナイ」といって断るほどでした。

ですから幼稚園に入っても、友だちと遊ぶことは苦手で黙って人の遊ぶのを見ていることになりました。

園児の「合宿」（年長組のみ、夏休みに付添なして二泊三日行なう）の時に、やっとます子ちゃんと友だちになり、二学期頃から笑い顔が見られるようになりました。けれど、ます子の後にくっついて遊ぶという程度でした。

けれど、四年生で合宿に参加した時には、この子が？ と思うほど、ハキハキしていました。

二年生の男の子たちの世話をし、雑草の採集もキチンと整理をし、先生にも自分から質問します。私共が洗濯をしていますと、「先生、たいへんネ、手伝いマシウカ」と声をかけます。ものしずかなことは以前と変わりませんが、積極的に行動するという点では、見ちがえるようでした。

この子のほかに、同様の事例が、二、三あります。

ちょっと気になる事は、どの子の場合も、リードする友だちがついていて、幼稚園時代はそのこどもの影にかくれていたと思われることです。

学校がちがってこの友だちから離れたことも、大きいのではないでしようか。

或いは成長して自分の実力に自信がついたので、ものおじをしなくなったのかもしれない。

* さとしの場合（小学四年）

合宿に参加した同級のおおちゃん、例によって人をつついたり、人の鉛筆をとって逃げたりします。きよし君はこれを目の敵にして、本気になって向かってゆきます。

こんな時に「のおお君ハ、フザケテイルノニナー。本気ニシナケレハイインタ」といって、のおおを庇い、きよし君の攻撃を批判しています。自分はキチンときまわりを守りますが、人に対しては寛大で、相手への思いやりもあり、したがって、ともすれば人のあげあしをとりたがるきよし君も、彼には一目を置いています。

このさとし君が、幼稚園の時には、母の腰にまつわりつき、何か事があると、すぐ涙をためて先生のそばによってくるようなこどもでした。

大勢のこどもの中に入れて、お母さんは初めて、自分のこど

もの気弱さがわかり、今までの育て方を反省して、お母さん自身の態度の変化によってくんくん変ってきたこどもでした。

小学校に上ってからは、成績がよいので、ますます自信をつけ、赤ん坊くさい馬鹿正直なところは昔のままながら、学級委員にもえらばれて、いたずらっこののおおちゃんも一目おくようになったのです。

小学校では、成績がよいということはたいへん大事な事柄らしく、頭がよくて、甘ったれていたたり、でき栄えを気にして引っ込みがちだったりすることもたちは、三、四年になると、みちがえるようにハキハキしてきます。

○ おどおどしたり卑屈になったりする。

この反面、小学校で成績があまりよくないこどもたちは、簡単なゲームをしてもしり込みをして全然手を出さないとというような態度がみられました。

* たかおの場合（二年生）

入園当初はなれにくく、二カ月位付添を離しませんでした。けれど、年長組になる頃は仲良しができて、殆んど手がかから

なくなつたのです。

けれど学童の「合宿」では、明るさが消えて、おろおろした様子が目立ちました。

この子の行っている小学校は特に成績のよい子が多いので、目立つのでしょうか。成績だけが人間の価値ではないのにはほんとうに残念です。

☆ 高校、大学生の場合

高校や、大学生になると、その変化などもっとはつきりしてきます。

* てつおの場合（大学一年）

幼稚園時代、雨の日など女の子の傘に自分の傘をぶつけて骨を折ってしまうようないたずらもしますが、人情ぼくて、年下の女の子をたいへんかわいがっていました。反応がものすごく早く、俠気のあるファイトの魂のようなこともでした。

この子が、親しい女子学生の死にあつて、その悲しみの消しようにもなく、幼稚園を訪れたことがあります。

鼻ばしはつよいけれど、情にもろい性質は全く昔のままで、

その純情さには何とも応待のこともありませんでした。どうか無事にこの危機を切り抜けてほしいとねがうばかりでした。

これなどは幼児期の性向が一層はつきり擣めた例ではないでしょうか。

* えり子の場合（高校二年）

この子はひとりっ子でどこへ行くにも母が附添い、希望のものは何でもかなえられていて、自分から、ものをねだることは殆んどありませんでした。

ところが高校になつてから、「ガラッと変つた」と母は訴えます。

男女共学の大学を受験すると主張し、浪人しても平気といひ、現代の小説は形容詞が多いからきらい、古文の方が簡單明瞭でおもしろい。「なぜ私は公立小学校ニ入レテレナカッタノ」（現在女子の大学附属小より高校に進む）と愚痴をいうようになります。

幼児期には、おとなの庇護のかけにかくれていたこと、意志が、自我の成長に伴つて、鮮明になつてきたのではないでしょう。

☆ 社会人の場合

大学などを卒業して社会に出ますと、またちがったものを感じます。

* ひろしの場合(三十六才)

彼は幼時に父を失い、母の手で育てられました。幸い経済的にはたいした苦労もせず、大学を出たのです。

「幼稚園時代は茶目な坊やでした。

「町っこ」のがき大将の後にくつついて、「ヤッチャエー」と、お尻をふりながら歩いて歩き、△幼いのでフラフラした感じ▽けんかの渦にいつも巻き込まれて、みんなが叱られても、彼は横目でニヤニヤ先生の顔を見ながら、いつも「お小言」からのがれているような幸運なこどもでした。

多少「やじ馬」的などころはあるが憎めない子、といった印象。

現在、自分でも「僕ニハヤジ馬的ナトコロガアル」と認めています。が、なかなか現実的です。

結婚問題が起きた時に「僕ハ友ダチトシテ話シ合エルヲ、

妻トシテハ考エナイ」「妻ハ子ドモヲ育テラレル人デアレバイ」と。

いくつになっても少女の夢をすてきれぬ私は、「友だちとして好ましい人は、妻としても好ましいのではないか」と、思わず彼をみつめてしまいました。

しばらくして、戦前、戦後の動乱の中で、家族の中心として活躍してきた彼にすれば、このような考え方をするのも当然なものではないでしょうか。幼児期と変らぬものと、変わったものを持つことが当り前ではないかと思いかえしました。

書いていけばきりありませんが、確に変わらないものと、変わるものがある、どういう種類のものは変わらず、どのような性質のものが変化するのか、ここに幼児教育の手がかりが秘められているように思います。

しかし、こどもにとって幼稚園は一、二年、或いは三カ年の短期間であり、家庭は一生つづくものですから、幼稚園教育も、家庭教育としっかりと結びついた時のみ効果ははっきりするように思います。

(白金幼稚園)